



めじかじ
通信

No.158

太陽光パネルを考える会 会長

柳澤浩一さん (68歳)

大久保

エイジングと薬膳

エイジレスライフって？



3年前、48年ぶりに小諸に帰り、小諸市民に戻って2年目の柳澤浩一さんが猛烈な勢いで友人を増やしている。「小諸の人々をつなげようと思う。自分もつながりたいしね」と話す。友人の見つけ方は、講演会や勉強会に参加し、市議会を傍聴し「これ」と決めた飲食店に通い詰めるなど。先祖伝来の畑で農作業中に「見かけない人だけれど、家はどこですか」と通りすがりの人に声をかけられた。なつかしい故郷の大久保はそんな土地柄だ。友が友を呼び、今では「小

諸市環境審議会」「図書館友の会」「糸の街小諸」「風穴の会」などの委員や会員として活動をしている。「糠地・村上蕎麦打ちの会」と「太陽光パネルを考える会」では会長を務めているが、名刺は持たない。

柳澤さんの実家は、手広く菊の栽培を営んでいた。農業を手伝わされながら浩一少年は「世界で活躍する仕事」に夢を持っていた。

最後に使った名刺は「ビジネス・マーケティング コンサルタント 柳澤浩一」とあるが、それ以前はずっと外資系



の医薬品医療機器業界にいた。工学部出身ながら、入社時から経営や市場調査部門を担当。三十代で社命により大学で経営学を学んでいる。長い海外赴任はなかったが、毎月海外に通うような形態で夢がなかった。インフルエンザの特効薬「タミフル」とコロナ禍で知られるようになった「PCR」を「日本に導入したのは私」と自負している。二度とも会社上層部を説得して導入に向け、記者会見に臨んだ。すぐに厚労省から反応があったと話す。

48年ぶりに落ち着いて小諸を見ると「衰退したな」と感じられた。「小諸は自然や古い物を大切にしていかなければいけない。しかも小諸を楽しみたい」これが柳澤さんの思いだ。「蕎麦打ちの会」はだれでも入会できる。ザル蕎麦と天ぷらを食べながら、楽しく蕎麦の打ち方を練習している。「太陽光パネルを考える会」は太陽光発電を始めたとする自然エネルギーの有効性を認めながらも、景観上の問

題や災害が起きた時の危険度と、二酸化炭素削減に有効な森林の破壊を問題にしている。発電以前に本来は節電から始めるべきではないか、と考えている。

小諸を良くしよう楽しくしようとしている人を見ると、柳澤さんのコンサルタント魂がじつとしていない。手伝うどころか助けなくなる。「製薬開発のための化学合成装置販売会社」を立ち上げて8年ほど経営したので、たいていの企ての道筋が見えている。素案原案の段階から一緒に考える。

このところ柳澤さんは「市民の声を行政に届けよう」と、週に一度は市役所に行き提言を続けている。太陽光パネルに関しては、付近の住民から「夏の暑さが耐え難い」とか「発電の音がうるさい」との訴えがあったという。また「小諸を楽しくする」助けになればと、自宅敷地内にある農協支所だった建物を改築。床張りにして大勢が集まれる場所にした。

(取材・文 佐藤 万千子)

エイジレスライフ：内閣府が推進しているこの言葉ご存知ですか。高齢になっても生き生きと元気で社会参加するという意味です。しかし、加齢とは一体いつから？受精卵が着床した時点という説もあります。が、3千年前に作られた中国最古の医学書『黄帝内経（こうていだいけい）』には、女性のからだのピークは28歳から35歳、男性は32歳から40歳と記されています。その後は、ゆっくりエイジング（加齢）が始まっていくというわけです。

その根拠となるのは、からだは女性7年周期、男性8年周期で変化するという考え。できるだけ下降の速度を遅くし、未病の段階で病気を防ぎ、健康で若々しい心身を維持する。薬膳はそのための食療法といえます。五臓を老けさせない食事、瑞々しい肌を維持するための食事など、日々の生活の中で、身近な食材で実践できるエイジレスライフのための「口福」。

次回から、始まり始まり。

(国際中医薬膳師 小清水ゆら)